



增補  
正  
仇訛家時記彙考  
作  
五



雜之卷目錄

賦物之事

一兼

和漢の事

ハ

万句十首韻

ハ

百韻の式

ハ

米字の式

ハ

七十一候の式

ハ

易の式

ハ

源氏の式

ハ

五十韻の式

ハ

四十四の式

ハ

歌仙の式

ハ

長哥行の式

ハ

短歌行の式

ハ

十八公の式

ハ

首尾の式

ハ

表合の式

ハ



發句の事 ハ 脇句の事 ニ

第三の事 ハ 四句目の事 ハ

月花定座 ハ 去嫌大意 ハ

句數並去嫌 ハ 季節の跨物 ハ

嫌古式八ヶ條 ハ 指合の事 ハ

正花の事 ハ 戀の詞 ハ

切字の事 ハ 発句の格 ハ

押字の格 ハ 抱字の格 ハ

### 俳諧の字義

**史記滑稽傳** 注ニ 姚察云 滑稽猶俳諧也 言

諧語滑稽其知計疾出故云滑稽也 ○青

藍云古今集ノ俳諧とあるより 誹と俳の

議論諸抄よえて一決むるに 誹と俳の

古今集打聞ふ今の本ノ俳諧とあるハ 写し

誤るるあり 草の手より俳と嫌のまゝに

あるとゆゑ後ふさぬくりいづづ

事ふりと 真淵翁の考へくの如し **正字**

**通誹** 數尾切 説文 誹也云 俳 鋪理切 俳優雜

戲也云 同義 俳のらざるをいふに 誹と俳

階書 候白字ハ 君素 有捷才 為 儒林郎 通

不待威儀 好為 誹諧 雜説 ます世説 新語補の

注ふと 誹諧とあるハ 俳と俳と 誹と通

ぢのちのふらふら 馬琴翁の説

ろく、世説の本文は侯白好俳諧とくき開卷  
 一笑七之巻引とくき俳諧とあまの誹を  
 俳の誤であること徴し、支考が十論芭蕉  
 家の書法やと人偏の俳諧と用ふとい  
 へるに據あり

俳諧之連歌權輿

詩家の俳諧体は小倣ひて和奇は俳諧体  
 とくきつゆあつては俳諧とあまの誹を  
 俳の誤であること徴し、支考が十論芭蕉  
 家の書法やと人偏の俳諧と用ふとい  
 へるに據あり

集 雜体連奇之部 奥山小舩く音やまことあまの  
 俳諧とくき俳諧とあまの誹を  
 俳の誤であること徴し、支考が十論芭蕉  
 家の書法やと人偏の俳諧と用ふとい  
 へるに據あり

俳諧の権輿といふは同上 元句連奇 黒田方思

戸のくく小音とあり、堀川院云 俳諧十論 文明の  
 頃あつて山崎宗鑑法師、其世は俳諧の名あるよ  
 り、守武望一とくきと學びて、百韻とつて十句  
 とつらぬ、貞徳貞室ハ宗匠の名あり、唯俳諧の言  
 語をつつらぬ、貞室ハや芳野山の花と詠  
 花のよりの山貞室、隅田川の鳥小吟じて、  
 貞室 其句ハ和歌の姿情ふくむ、今の俳諧の根  
 の額をくく、俳諧の涅槃ハ破つてとくき、且言  
 語のとくきを得て、眼小姿情のまじり、とくき  
 ぢ云

青藍按、小貞風の涅槃といふは、  
 五畿内ふるふる雪や川の飯 五器と  
 風の小空のさびく、とくき、又檀林  
 子木も紅葉、とくき、唐、とくき

例の輕口をさしてつるぬらと。

葛の松原 元禄五年卯 本文考撰 芭蕉庵の叟 一日 咭馬

とてらふふ、曰風雅の世小行も色も、もも人  
ハ斤雲の風、臨りるがささく、一回ハ皂狗  
とあり、一回ハ白衣とかりて、そのふもはれる  
處をあらむ、むららむ、中間の理あま、べしとて  
春を武江の北ふ閉、多む、雨静、うく鳩の  
声ふの、風やもらう、うく花の落る夏、あそ  
し、弥生とあつり、さしき、ころも、ああり、蛙  
の水ふ落る音あむく、あらむ、言外の風情こ  
の筋あうの、ひて、蛙飛、むむ水の音、とつる七五と  
得、多り、り、晋子、う、傍、侍、く、山吹、と、ふ  
五文字を、か、う、む、り、く、を、ん、く、や、め、よ、ま、を、り  
侍る、ハ、唯古池、と、ま、ま、ま、り、め、云、此、句、う  
自己の眼と、ひらき、も、ま、ひ、正風、の、一、派、ひ、ら  
ま、り、ら、る、と、い、し、

### 俳諧の大意

俳諧の名ハ史記の滑稽傳より古今集より  
こじまり、連哥、ハ、う、つ、り、て、より、宗鑑、を、志  
と、い、守武、と、ま、ひ、俳諧の詞ハ、ひ、ら、ま、り、ら、る、れ  
ど、一、座、の、興、の、い、い、捨、り、て、今、の、俳諧の、姿  
情、あ、わ、ら、む、且、俳諧の、心、と、傳、へ、る、人、あ、あ、き  
故、ハ、芭蕉の、翁、俳諧、ハ、古、人、あ、い、と、り、い、と、や  
と、い、ま、り、門、人、あ、い、と、や、ま、り、て、家訓の、秘、文、と、い  
あ、せ、り、ら、る、と、い、その、俳諧の、心、と、ハ、虚、実、の、自  
在、より、世間の、理窟、と、ま、り、ま、り、て、風雅、を、遊、ぶ  
を、り、ふ、あ、り、ら、る、と、い、俳諧、ハ、三、条、あ、り、世情  
の、人、和、ハ、五、倫、の、常、法、あ、り、と、い、ま、り、ま、り、と、俳諧  
ハ、名、と、ま、り、ま、り、と、い、ま、り、ま、り、風雅の、体、と、ま、り、ま  
り、ま、り、此、三、つ、を、あ、り、と、い、ま、り、ハ、身、ハ、千、重、の  
羅、綾、と、り、ま、り、と、い、ま、り、一、枚、の、こ、い、と、い、ま、り、

まを口ふ八珍の菓肴とつらぬるも一瓢の飲  
 の樂とあひの心ふ世上の變とありて笑言  
 ふ耳と遊むむる俳諧自在の人とのてい  
 こもいらのこころをこころしくなく俳諧  
 ふ遊ふ時ハ産と破る業と怠るといつる放  
 逸のうき名ともあぐらひて世法の一切も  
 るべし

增補 俳諧歳時記 雜之部 曲亭主人纂輔 藍亭青菴增補

一卷之式 賦物

貞徳云連哥六五箇十箇家  
 ど賦物にほど俳諧は百韻な  
 づら俳言を賦も連哥あれ端作りとも俳諧を連哥と  
 書きさし蕉門ハ賦物の沙汰ありんとい心得の  
 小大略と記す 又ハ草賦物の文字直ハ立字ハ面と變ハ  
 賦し物の文字ささまりたる文字とをあらんハ五箇あ  
 づらふ事ゆれし発句ハ太くもさうも犬ハ山ハもこころ  
 たよハ山櫻の発句ハ太くもさうも犬ハ山ハもこころ  
 故ハ蜂ハ魚ハもこころハ餘ハもこころハ准ハ一字露頭  
 二字返音以下百韻の俳諧やとてささまりんハ云

賦何衣連哥  
 年毎ふみまどと花ハ櫻ハゆ  
 賦何袋俳諧

あれもふこころ何とて世々の春  
 せんハ上賦とつらぬる端作り何とて立字ハ面と變ハ  
 のゆらぬる物やハ句中の春とハ立字と變ハ面と變ハ

春袋と取る物あり始の句ハ花衣と取るものあり

様何

天の川水若く入りりしとつね

是ハ猿若と取るものあり餘ハ准へるものあり

一字露頭

あやうしうま寝ぬの浮世の杜宇

是ハ句中の寝と音ハ取らぬものあり

二字反音

籠て飼とらぬも高し寺鳥

是ハ句中のさをもとへて杉と聞あまふ

三字中畧

去て来る年のあめとや魚千里

是ハあめとらぬ字の中を畧して細と取るものあり

三字上畧

蝶鳥やちりうひとまゐる花鳥

是ハとまゐるの上を畧して丸と取るものあり

三字下畧

月ハひとの影ハ目数のあまふものあり

是ハひとつのつ文字を畧して人と取るものあり此外四字上

下畧もあつハ難波津と上下畧せぬ庭とあまふものあり

五文字中三字畧もあつハつとらぬものあり中三字畧せ

ハ爪とあつとくひ又一字借とらぬハ白雪ハ山の額の化粧

かたこれハ句中のけともと聞せぬものあり

二字除篇

龍門あらで都へのしを鯉の魚

是ハ鯉とらぬ字の魚篇と取て雪とはすしと

他添

鶯やよび哥毎ふとね題目

是ハ毎の字ハ篇と添て梅とあまふものあり

### 和漢之事

大く俳諧の法と守るべし和漢ともふ  
五句を以て限りとも但し漢の對ふ至り

六句ハ可及事景物草木亦貞敷和漢ハ通用せし

百韻ハ一の物ハ和のこより出づらハ漢ハまこと異名あり

用ふこともあまふ二句の物ハつとて万葉の書分ハ

用ふべし和漢ハ漢ハ韻字と用ふべし漢和ハ和ハ韻

奉句ハ和漢ハ漢ハ韻字と用ふべし漢和ハ漢ハ韻

万句 千句 十百韻

支考曰連俳の二巻より  
百韻と数の限りあり

十巻とくさぬれ千句といひ、百巻とくさぬれ万句といひ、  
十百韻と千句の差別は二座と十座のちがひやく去樂の  
用捨あり  
**百韻** 表八句 七句 裏十四句 九句 目月 二の表  
十句 目月 二の裏十四句 九句 目月 三の折  
のちあり  
二の表裏  
ふかぬし 名残の表 三の表 同裏八句 目月 支考曰  
四のひききとつとく、名残の折といふる、

米字

表八句 七句 裏十四句 九句 目月 二の表  
目月 二の裏十四句 九句 目月 三の折  
三の表 同裏  
八句 七句 目月  
支考曰七十二候といひ、百韻と三折  
ふまふきと、三の折ふ裏と八句とも、

易

表八句 七句 裏十四句 九句 目月 二の表  
目月 二の裏十四句 九句 目月 三の折  
二の表 同裏八句 目月  
支考曰源氏といひ三折ありと、ハ哥仙の愛数ふ  
と、中項の名目ありと、其名ハ源氏の六十

源氏

帖ふれり、○哥仙三十六句ふ二の折二十  
四句くさつて六十句とも花月の定座同、

四十四

支考曰四十四ハ五十韻の愛  
数ありて、二の折の裏と八句と  
あせると、其日其夜の時宜と見合せ或ハ縮り或ハ延して  
一座の首尾と作るべきとめあり、其名ハ四十四とよしとハ、  
例のハ俗言ふがら、称せば、  
祝言のひききとつとく、

歌仙

表六句 目月 裏十四句  
七句 目月 名残の表  
同裏六句 目月 ○支考曰哥仙ハ名目の風流也、ハ  
十八番の哥合よりその讀入と哥仙といふふ愛ふハ上  
下の句と合せて、三十  
六吟の名とあせり、

長哥行

表八句 七句 裏十四句 九句 目月 二の表  
九句 目月 名残の表  
十五句 目月 同裏十四句 九句 目月 三の折  
初月 名残の  
表四句 目月 裏八句 七句 目月 二の表  
表八句 七句 同裏十四句 九句 目月 三の折  
目月 ○支考曰

短哥行

歌行も短哥行も、求韻の俳諧の為ふと例の支考ハ新  
製あり、その辨ハ東花式及び和漢文操求韻の序ハ

十八公

表十句 九句 裏八句 七句 目月  
目月 ○十八公ハ  
千歳不愛の松と象りて数とあり、

首尾



表六句目月裏六句目花の支考云首尾の吟ハ一座の時  
宜ふ或ハ奉納の諸願と祝し或ハ歲暮歳旦の賀しと  
始終をこのふる意ありさるハ六々とも八々とも

**表合**

表と裏の首尾と合せて月花二座模倣なり  
八句七句 **西華集** 支考 凡例云此表ハ神祇あり教  
あり意無常と云らるハ名所とのハ人の名とのハ一巻の  
始終と云ふつゝ心あり **湖東問答** 去来云去秋考

爰ハ旅寐して卯七と表合あり我ハ語て曰九表合ホの  
非諸ハ尋常の式と替るべし表の内ハ一巻の案と以て  
去来をももむらち用やまき事なりと云ふ一段

**發句**

諸抄云一座の卷頭  
ふれハ宗西貴人老

面白くもくも答ぬ二子  
よて翁ハ聞かざるを悲  
人の外あるべしむ句の体伸く和く詞やきらふ  
心さうしちせし切字の道理ハ切字の条ハ注せ

**脇句**

発句の時節と違へるとの餘情といふべし  
發句神叙意無常時宜述懐ふれば脇句も同  
くそのゆらひありし發句雜多ハ脇も雜あり諸抄  
云韻とてあそきて留る事なきふもあらぬと切者の業

あそきて初心のまゝと云ふあらざると云いませう  
あてその故と明きと青藍按ざるハ脇ハ哥の下の句ハ  
して上の案とつけ結と正格と也 但ハ發句脇句ハ長  
意と結ぶと未練なりしてあそよ留る時ハ意残りて  
脇句の体と失ふや初心のまゝと云ふあらざると云い

ひたとこの故とあらざると文字にて留る時ハ太りこ  
意切て脇句の体と失ふとハ字留りなりと云ふ  
べしと云ふとて留る例のハ **續虚栗** たびハ我言

よをれん初時雨芭蕉又山茶花と病きりて由之 **冬**  
の日霜月や鶴の行むらびあふ荷や冬の朝は夏  
ふりたり **芭蕉** **曠野** ソウソウの名もじら

**第三**

春の草荷や打まて蝶の夢と云ふ **芭蕉**  
諸抄云ホ高く脇句ハ轉るとよと云ふ句ハ  
ハ才三の本意ふあらしと第三にて留る留る  
ふと云ふこれゆこの故と明きと青藍按ざる

發句の姿ハ轉せしめんと意と残して下句ハ及ん  
と才三の格と云ふ其故と云ふとてふらん  
ふと下と結ぶと云ハ大と意残りて才三の体と失

故してありの留をまづりし人 但し四句目より手前

れ 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

の意を残して下句及むる 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

の道理を 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

花 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

と木の兼降 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

出 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

珍 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

ふ 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

諸 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

と残 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

とと四句目の格 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

き 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

き 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

### 月花定座の心得

去來 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

先師 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

こと 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

季 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

つ 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

待 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

辞 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

呼 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

云 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

合 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

故 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

ハ 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

月 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

あり 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

嫌 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

ふ 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

と 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

言 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

雑

### 去嫌大意

去 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

是 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

言 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

連 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は

連 此の意は 定座の句 定座の句は 定座の句 定座の句は



二句より多く、人倫、居所、  
一人倫、二句去、居所、  
く、居所と居所、二句去

旅休、夜分、生類、  
旅休、上、夜分、上、  
生類、二句より多く、  
出、獣鳥と鳥

植物、  
の如く、  
獣と獣鳥と鳥と三句去、  
植物、二句より多く

名所、國の名、  
木と木、草と草、三句去、  
木と草と変、二句去、  
名所、國の名、二句より多く

衣類、  
衣類、二句より多く、  
衣類、三句去、  
衣類、三句去、  
衣類、三句去

降物、  
降物、二句より多く、  
降物、三句去、  
降物、三句去、  
降物、三句去

天象、  
天象、上、  
天象、上、  
天象、上、  
天象、上

食類、  
食類、三句去、  
食類、三句去、  
食類、三句去、  
食類、三句去

時分、  
時分、夕、  
時分、夕、  
時分、夕、  
時分、夕

火体、風体、  
火体、三句去、  
火体、三句去、  
火体、三句去、  
火体、三句去

二句去、  
車、馬、舟、頂、  
車、馬、舟、頂、  
車、馬、舟、頂、  
車、馬、舟、頂

三句去、  
同字、月、月、  
同字、月、月、  
同字、月、月、  
同字、月、月

五句去、  
同季、霞、田、竹、月、  
同季、霞、田、竹、月、  
同季、霞、田、竹、月、  
同季、霞、田、竹、月

七句去、  
李、節、の、跨、物、  
李、節、の、跨、物、  
李、節、の、跨、物、  
李、節、の、跨、物

載入、出替、  
載入、出替、  
載入、出替、  
載入、出替

鷺、鴨、目、白、鳥、  
鷺、鴨、目、白、鳥、  
鷺、鴨、目、白、鳥、  
鷺、鴨、目、白、鳥

白、瑠璃、鳥、  
白、瑠璃、鳥、  
白、瑠璃、鳥、  
白、瑠璃、鳥

掠、鳥、  
掠、鳥、  
掠、鳥、  
掠、鳥

其、時、  
其、時、  
其、時、  
其、時

其、時、  
其、時、  
其、時、  
其、時

其、時、  
其、時、  
其、時、  
其、時

山雀、日雀、四十雀  
この類ハ秋のつこふ耳  
もれに、帯ることも行とも、跡

駒鳥  
春ふれど度るふい  
秋も用ふべきや、  
裕

鯉  
秋の二字と断れど、秋  
掛  
手の春と定む  
れど今例や

野遊  
春ハ摘采の遊びより、秋ハ草  
付の奥ありて、決て春秋の二季

鶉飼  
鶉毎、桃の節供ふり、まうて菊の節  
供ふ終るもれ、まうて鶉飼の春の氣

節供  
何の節供、断  
りまとも、春夏

鮎、葉  
葉ふハ上下の字と断れ、鮎ふ  
若し、のい、落るのい、織る

祭  
今例ハ、春秋の差別あり、今例ハ、まうて、  
その断れ及ぶ、まうて、つれ、れ、も、三季、用ふ、まうて、  
鷹、四季、用ふ、まうて、物、祭、鷹、の類、れ、れ、れ、れ、れ、れ、  
其、季、の、名、目、と、まうて、四、季、の、差、別、と、まうて、まうて、まうて、

鷹  
非諧ハ多用あれ、其名目と断る、及ぶ、其、  
の、季、が、まうて、決て、四、季、用ふ、まうて、以上、貞、享、式、  
より、抄、出、まうて、

古法可有取捨事  
杜鵑、深見草、  
柳、櫻、鶯、螢、杜若、芭蕉、蜻

牛、鶉、鶉  
此十品ハ象物の數量あり、古抄ハ、此  
類と立音訓ハ、替、異、名、ふ、呼、で、ハ、三、ツ、と、まうて、  
四、ツ、と、も、兼、り、れ、れ、今、の、俳、諧、の、式、目、ふ、と、一、座、ハ、尺、一、と、  
定、め、ら、古、今、の、取、捨、と、ハ、此、謂、あり、右、ハ、十、品、の、名、目、と、  
奉、て、万、物、万、象、の、  
凡、例、と、あ、せ、まうて、

去嫌可有斟酌事  
父、母、男、女

主、誰、身、獨、味  
此四品ハ人倫の凡例あり、  
此類ハ二句づ、去べきや、

僧、寺  
此二品ハ古式  
定て、指合とらる、まうて、まうて、  
人、倫、ハ、非、也、

雑

居野いの非ひををとといいててもも今いま式しき親おや王わう皇こう女にょ天てん童どう  
小こ指さし合あとと縁えんへへととちちりり、

天てん女にょ帝てい御ご門もん仙せん洞どう新しん院いん鬼おに  
佛ぶつ此こ平へい品ひんハハ古こ式しき小こ色しき々々のの説せつわわんんとと由よし人ひと倫りん小こ二に  
句くアア去きへへききりり、御ご門もんハハ居い所じよ三さん句く去きへへききりり、

若わ菜さい郭かく公こう松しょう虫ちゅう水すい仙せん水すい鷄けい  
三さん日にち月げつ尾び上じやう此こ七しち品ひんハハ會かい意いのの名な目めでで決けつして  
ニにツツハハ有あるるととありあり會かい意いとと

二に字じ三さん字じのの意いとと會かいりりととのの名なをを作さくるる  
故こありり字じとと造ぞうるる六りく書しよのの一いつ名なありり、

古こ式しき小こ此こ二に品ひんハハ雪せつ四しツツ雨う二にツツととああれれどどもも、  
名な類るいああれれどどもも雨うとと四しツツああれれどどもも、

馬うま車くるま飯いひ餛ちん茶ちや酒しゆ此こ八はち品ひんハハ日にち用ようのの物もの  
ああれれどど座ざ小こ二にツツ、

有あるる松しょう小こ子しのの日にち月げつ小こ更せい科か花かよよ、

芳ほう野の此こ三さん品ひんハハ連れん哥かのの沙さ汰た小こ鐘かね小こ鉄てつ將しやう醬じやう  
一いつとと非ひ諧かいのの家か論ろん多たし、

爪つめ木ぎ小こ妻つま軟まろ小こ木ぎ篠ささ小こ佐さ々々羅ら  
翠すい簾せんのの首くび小こ水すい邊へん山さん伏ふく小こ山さん嶺りやう之し夜や

分ぶん此こ七しち品ひんハハ古こ式しきのの嫌きらひひ物ものとといいふふ、  
今いま式しき小こ此このの沙さ汰たありり、

轉てん寢ね眠めんのの字じ起おきのの字じ虫ちゅう砧あし  
此こ八はち品ひんとと古こ式しき小こ夜や分ぶんとと定さだめめとといいふふ、

烏う帽ぼう子し綿わた小こ木ぎ棉めん夕ゆふ立たち小こ雲うん  
此こ五ご品ひんハハ古こ式しき小こ附つけ句くとと嫌きらひひ、

兩りやう小こ笠かさ鷹たか鳥とり小こ狩かり此こ二に品ひんハハ古こ式しき小こ附つけ句くとと嫌きらひひ、

兼かみへへ一いつ總そうててハハ彌やま生せい師し走そう此こ二に品ひんハハ古こ式しき小こ附つけ句くとと嫌きらひひ、

古こ今いまのの違ちがひひありり、

古こ今いまのの違ちがひひありり、

古こ今いまのの違ちがひひありり、

古こ今いまのの違ちがひひありり、



△冬牡丹 △冬椿 △冬梅 △紅梅 △

緋桃 △梅櫻の紅葉 △山吹 △郭公

此八品ハ花鳥の中を只一句とて二句にあらまうべき物の  
凡例あり此段の詮用ハ二句のまき異体ハ只一とて  
二句あらまき同体ハ二とせし  
二句一意の用とまきまきあり

日用可輕物之事 △昔 △曉 △庭

△垣 △袖 △襟 △湯 △汁 △文 △使

此十品ハ古式ハ一と二とあり  
△折とりの替てハ四もあり  
△照 △曇 △泣

△笑 △植 △荇 △眠 △覺 △起 △居  
此  
品ハ日用ハ多用ありハ面と替  
てハ七つもハ八つもあり

△目 △鼻 △耳

△口 △手 △足  
此六品ハ支体の幹まきとて  
の用多けまき折と替て四も

有べし

无可不審捉之事 △老 △福神 △

親子  
凡中古の式目と論むるハ第一連排の用と  
不用とをまきまきまき連哥ハ艶詞のありと

学び身ハ二意の理窟とまきまき滑枕昔ハ談笑の和  
とまきまきより今の俳諧の扱ひハ雲泥のちがひあり  
事ありこれ中めと不審とまきまき沙汰ハ老と述懐と  
表ハ句ハ樂へと福の神ハ權とまきまき色とまきまき彼の理  
窟ありと命の字とめて述懐とあり親よと

△

稻妻 △電光 △烏鵲の橋 △龍 △民

の寵  
古式ハ稻妻電光と天象ハ樂とまきまき鳥  
鵲の橋と生類ハありまきまき龍と生類ハ樂



不審のまゝ用ふべき也但し今式の道理よりして嫌之

△青柳 △菘 △櫻人 古式は青柳詠ハ

春にして植物は春の季と持て植物は三句より久倫は二

句より同三品の詠物は三色のちひあつて今式は

三別の道理ありとも道は一貫の日あつらん今式は

△泪の露 △泪の雨 △青楓 △

檉鳥 泪の露ハ降物として泪の雨ハ降物とあら

秋の姿はわらわ楓は紅葉の体あるを也若楓の

下と若楓ハ夏あつて青楓も若楓ハ雨所ハ雨注のちひあつて不審の不審と也

曾不及詠物之事 △雪 △霰 △椿

御今ハ雪ハ霰ハ附句と嫌ハ 椿ハ雜あり花と結び

春多ク蓮の実ハ夏多ク蓮ハ花とあり実を結ぶ

右古式とわかく蕉門一派の確論をて蕉翁の

授記こと貞享式ハ載り爰ハ其大畧を記す

外の去嫌ハ御今 芭環 通俗志 等ハ

指合 貞享式

合とつてふその同字

数字ハ送字ハ旧式ハ

雜

式ふむげとる  
と左ふ抄出ス **いづく** 二ツの折と替へし  
物とてあふふとていふふいふ いづく  
といひうらう二句去をり いづくの  
まぶ 一ツの物

いづくせん 一ツ〇上の五文字ふむく字をり  
いふせん留てふむく字ふり以上  
二ツの内今一ツ いづくの  
の内ふむく いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

いづくせん いづく  
いづくせん いづく

**いづく**

**いづくの**

**いづくせん**

**は**

**む**

**とむ**

**ふ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

**とむ**

いづくせん

いづくの

いづくせん

は

む

とむ

ふ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

いづくせん

いづくの

いづくせん

は

む

とむ

ふ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

いづくせん

いづくの

いづくせん

は

む

とむ

ふ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ

とむ







花形 小鼓よりあり種 花子此狂言 物ありや

燈火の花 植物あり 花の川 金類

花紅葉 青藍云炭俵集貫之梅

角う句と秋季うつましく正花とせる例あり

貞享式 我家小詞としての意

戀の詞

一字より嫁と娘とと野老傾城の名目をも  
當句小意の姿情ふきこも例の詞と意せむ此  
ゆかり他門より意と一句を捨るとのふ方外の沙  
汰あるよし意ハ陰陽の道理も三句より五句ハ  
時小をとりて意と一句を捨まじき故なり云○  
支考云意の一条ハ今式の大事なりて意ハ一句を  
捨まじき陰陽の理のことなりてこの外ハ未然未定  
りんとあらん其故いんとまじき詞の意ハ字ありと

心の意ハ句あり故その時との句ふむるを  
句情ハ兼てさるるたたく此頃の附句ハ普請  
場の飯や一度不起とるハ當の先小そとやと手拭  
との附句ハ普請場の臺所ハ只今膳と居んとてと  
りの埃と掃きとるふおとより起出る人わおと折釘  
の手拭と當小のすく及び越まき出ると大工木挽  
の立まきとて物の世話まきとあるも三句目の作者  
意とあらん打越のまきと轉せんと起情の附方を  
棄てて思へばおとりのぬかりのつれあてとハ傍輩中の  
まのぬね床の下ある率也川のいさよと顔  
あはれめあつと前句の作者ハうつて意の心ハ  
なまじも後の眼力ふさてとと意の姿情と見附  
ハ彼と我との二句とありて意ハ決して二句との心  
○青藍云蕉門ハ意の詞と定まあるハあはれ  
あつのハ言葉のそとらきとて意あつぬものも意句  
とらまきとて作者のそとらきとてとれだばあつら  
詞ふまきとて句作まきとて許六云晋子ハ句ハ物  
ハ狂小男のそとらきとて云ハ意の詞一字カあり

踏ひく。慮の句あり近年俳書之。慮の詞と據  
 ぐくハその又の胸中せまきことと云ふ云。○慮の詞ハ  
 慮の志より多くあつちと云ふ彼ふゆづりこころハ  
 わるまうと記し、いづり注釋とくく初心の便と云  
 戀 逢戀、別る戀、思ふ恋、恨む恋、待恋、待  
 る恋、思ふ恋、思ふ恋、絶る恋、絶て入し  
 き恋、夏恋、契る恋、あがる恋、物思ふ、うき  
 意の双恋衣、意草、意の病、思、思ひ、思ひ川、  
 深き思ひ、思ひの山、思ひの烟、斤思ひ、相思ひ、  
 思ひの情、うら多く思ひ、思ひの洲、思ひ草、思ひ侘、  
 思、情、深き情、薄情、情、ふげの情、情とそ  
 等閑の情、泪、泪川、泪の洲、涙の海、涙の雨、  
 りく心あり、泪、袖の涙、袖の海、涙の瀧、  
 袖の雨、涙の川、海、恨、うらこの山、恨、夢、  
 泪とくくくくくくく、恨、の海、うらまひ、夢、  
 ふくくく、夢の通路、夢のうらまひ、夢のたぢぢ  
 通ふとらん、

雅語譯解夢の

智入、嫁入、婚禮、待々郎、目  
 桶

新枕、若後家、若衆、寺若衆、男色、少  
 町若衆

念者、男色とらん、一の谷嫩軍記、六跡本屋敷の  
 段室書、中、是の隠居と云、脚子息の六跡本と云、

同年ぐらわの親子の中、畧、親ごまぢぢとらん、わ  
 のやふ大事ふとらん、いかり、且那の念者で、あ  
 まいっおとらん、念者と見分とらん、いさゝか、親分といわ  
 る、下、畧、玉海集、附、いかりとらん、念者ふとらん

別の袖、逢夜、密言、兼  
 連て年ふら、

言、私言、文、千話、  
 玉章、艶書、  
 文のゆとそ、

袖引、尻つる、門あら、辻あら、

前、  
 ことせとやみ人住めるあうと事  
 ことせとやみ人住めるあうと事





してたぐひ恨ら恨ら 垣間見 物のひまより

虫の印 のこまのまへへ 守宮の血と女の

肘ふぬあけし二期清しせむり春心と動うせ忍

ち消さるし博物志ふとて守宮ハ蠅雙ふ石

龍子と名く守宮の名ハ秦の始皇帝官人の私

ありし事とあひてその末を飼ひて官人ふ点と故

小守宮の名 轉合 中戀 て中めて取らうら

薄中 心中 やり 惚ろ

ぬろ心 後よび 後妻と うそわらう

和名抄後妻 和名半波余利 うちあり打とふ 妻と離別して

後の妻とむじふふとのちふよりて前の妻とて

ゆくごのよとりのゆり某の日ふ至れし前妻とて

めとてちとふかどもわのくもあひのものを

わらて後の妻のうて行臺所より合と打とて

後の妻のうとてとてとてとてとてとてとてとて

とて用意とてとてとてとてとてとてとてとて

の媒せりの妻と待女郎よりし女と双方の中

入あつひあごめてとてとてとてとてとてとて

事ハせざりしとてとて 日記室物集 亦後妻打の

事ハせざりし古くよりありし事あり 玉海集 附浅

草生ふらとあり打のちとてとてとてとてとて

禄元龜のころまでと有 とてとてとてとて

ぬく 脱起 とてとてとてとて の衣裳と反

下紐 身とあつと 指切 髪切 股

突尻目づらふ 思ひとてとて 年未深く

よめりける中の入の中言ふ又思ひの分ふ **偽り**、  
仇みたる度ありしくその思ひのあらざるをいふ

**難面**、うらみあり **伏**、背きくくの

**中**、  
こころをこころに年をうらうらしく思ひこころ中の互ひう  
心中に恨じこころの出来て解さるるありかたなり

**何事**、ゆき **は**、こむ **嫉妬**、  
**艶**、物の怪、

意の恨みこころにまき **後めこき**、  
目くこころあり

生霊死霊とのいふ **枕**、あらざる  
長枕、二つ枕、  
うき枕、手枕、

ウサシナ、キガユルセヌ **近**、まらざる  
近くてまらざる遠目より

とりの意あり **近**、まらざる **近**、まらざる  
近まらざる

**忘れ**、  
**親**、まらざる **中**、  
義ありたる親と

又わつと思ひのせむも親の制し遊てあそぶをいふ

一 **二道**、かくる **虫**、のたまふ  
日本紀わ  
かせこつ未

へきく宵ありまらざるの如の **濡衣**、  
あき名のこと  
ふいんふ或書云

むら、筑前守ありたる人の娘、継母の讒言ありて  
そのとりの雀の濡衣と借取て娘が朝寐をとりし

所、所ふむきくその衣と娘が盗みたるをいふ  
まむ、父をもちこて娘と害しぬ其のちの娘父の夢

ふくそをよめる奇ぬまらざる其のまらざるのぬれ衣  
長きあまのちのまらざる云名ふよりて説と説

けいこふ **は**、まらざる **駒**、  
人ふ意らざる人の乗る  
駒こころまらざるの駒

後頼集ころぬらぬ袖どゆり **我**、  
**さらば**、  
山の

の朱雀ふわの遊女此所 **錦木**、  
むら、陸奥やうか  
りん女の門ふ立る木

ありその木ハ一尺なりありて五色小彩りてその

中なる錦木錦木のふとを詞花集ありひるふ立初

錦木の千束ありてあり詞花集ありひるふ立初

がめ、匡房この外古奇なり、哲言文、紀請

男女よりいふ神文 かきつる香 女のみにていふ香

香のにおのつこのり重 肉陣 肉屏 天室遺事 揚國

ありてく 肥大 者と前行列て風と遮り蓋

人の氣を藉て相暖む故ふらまを肉陣後

宮 禁闕中美人 美人の名、美人と畫

漢書 王擣字ハ昭君漢の元帝の官人也云 西京

雜記元帝後宮既ふ多し常小見るとと得と乃チ

画工として形と番せり高と案してると幸と

諸官人皆画工を賂を獨王昭君をも遂小見るとと

えを匈奴朝小入て美人と求め閼氏小せんとも爰小

於て上番とせり昭君と以て行くと去小及んで

召て親とくると小後官才とと帝を悔ひ名

藉已小定ると帝信と外國小重んを故ふると人を

更も乃チ其事と窮案して画工と市小

棄つ、云く漢書琴操水の説述ふ異と、返覓

香 李夫人ハ李延年ク妹武帝の夫人あり返覓

香のこゝろハ世人の志るととあり返覓

空焼 薰物 留伽羅 袖の移る香 化粧

かせ籠 枕香炉 うちり香

紅粉 白粉 瓜紅 的 黛 眉扇 鉄槍

匂ひ袋 不二額 九額 密男

妹許 ゆく 女のゆく 紅絹 白陀羅尼 香の

支考々取ありと此恋句小ありと句体小ありと今

夫 世ハ東國の方 夫 婦 男 女 相 互

小夫とくると小夫 夫 婦 男 女 相 互

夫 世ハ東國の方 夫 婦 男 女 相 互

夫 世ハ東國の方 夫 婦 男 女 相 互

夫 世ハ東國の方 夫 婦 男 女 相 互

夫 世ハ東國の方 夫 婦 男 女 相 互

夫 世ハ東國の方 夫 婦 男 女 相 互

夫 世ハ東國の方 夫 婦 男 女 相 互

夫 世ハ東國の方 夫 婦 男 女 相 互

夫 世ハ東國の方 夫 婦 男 女 相 互

女房 女房 男房もと宮人の称あり今 主女、

外婦 房 寝所あり閨中ハ 花街 遊里、乳

室の津、神奇、江口、大義、祇園町、青樓 妓門、

浅妻船、吉原の里、鳴原の里、新町の里、遊女 偶假女、遊君、あま

遊身宿、同輪、遊女 此の君、難妓、宿、出女、長巻

紋家、揚屋、遊女 此の君、難妓、宿、出女、長巻

辻君、女郎、た、傾城 傾城、傾國ハ元美人の称 禿

開卷一笑、鵝老 妓楼の 紋日、水あ

の幼稚者、げ、まひ付煙草、つけどし 飲けり

れと付、比翼座、忍び編笠 酒と飲こ

かみ入者、泥町、今の田の茶屋まで編笠とよりこふり

一車ハ世人の志、所あればいとも、種彦云の編笠

とくんとあれば、衣よりふりゆくと、暁金 元禄

手編笠まも、千前編笠ともあり、江戸吉原の花街中、後朝雨とよきハ半と賣あり

こもを暁今といふ、五元集 郭公ありき今をいせ

けし、七八 濤蕩やして仁義礼智忠信を待 如

其角、樂 舞姫、 加やら 江戸まで舟般頭大坂小

白拍子、野郎 色 陰間 男色とひき 飛子 飛子

神媒 正字通路史、女端、正姓、 紙戒啓同是、曰神媒、

切字 貞享式 ひりより切字の事ハ十八字の品

例の何れもあつとこの故とありき、童部 の心経、む

中々、自己小分別、ことごとく 中古の俳

諧ふらふくの名目あれど、連奇 の用ああら

雜

ふくしともの切字の用とるは物不對して差別的  
 義あり、とまは是と持とけて物ニマよき故ふ  
 始あり終ありて二や一章の終句とまふなり九切字  
 の品らふは或ハ一字の働あふやの字よの字の類  
 とらふ或ハ餘韻の助字とあせるの字むの字の類  
 とらふ其外は何誰とらふ哉来と治定をるを迷  
 悟と動けは靜とらふ物ハ相對の道理ありあふハ  
 終句の切とのひて字と定むるふハ及ぶと耶と  
 とらふ馬とらふ哉来と治定をるたとい道理と  
 らぬ人もおのつら終句のとらふとらふ我來  
 ふハ心切といふ中の切といふ換切といふ名ありて  
 心詞といひのこせは能ある切字といふハ○青藍云切  
 字ハ心と切ハ句意と首尾とせんがとらふれい  
 へ定むる切字とらふも心切首尾といふもハ終句  
 あり、但し心とききりも下りふ  
 及びとらふ平句の格も、例ハ何故や  
 この時とらふもまが作ハ自作の働あり

中の切

船の恋やむ時ほやの朧月 芭蕉  
 きいへと出いふとよ月の雲

心の切

いさくつを。雪見かきうへ所まで  
 申して死ぬけしきいさをも。蟬の聲

換切

世と旅ふ代うく小田の行度り  
 人ハ家と買せて我ハ羊と忘

二字切

君火くけよき物とせん雪丸け

三字切

子供らよ。全顔咲ぬ。瓜むる

二段切

夕も。朝も。つるも。瓜の花  
 空甕も。空也の瘦も。寒の内

三段切

梅。若菜。まり子。宿のころ汁。

とまは

青くても有き物と。唐くも  
 米くも。友と。今宵の月の客

あまは

桐の木ハ。鶉鳴らる。癖の内  
 柚の花ハ。昔よのそん料理の回

玄妙切

春ちやうききとらふハ。月と梅  
 わろくと日つれあふハ。秋の風

雜

大まじ

辛奇の松の花より朧を、  
行春をまじりの人ととらむ。

無名の切

名月の花をこえて挿島、  
一家を枝ふら髪の墓春

中の切も、挨拶も、二段切も、三段切も、とていふも、おま  
とていふも、無名の切も、とていふも、心切あつとて、名目とていふも

ハ、初学のくぬ、

口合のや

夏也この煤うそま  
らぬ古格子 芭蕉

切や

朝がわや昼の鎖が  
うそ門の垣 全

捨や

露くく心こめ  
浮世をうかや

全 中のや

旅どくともや浮  
世の煤ちらん 全

ものや

白奥  
や黒

き目とわく  
法の酒 全

すこのや

むらんやふ甲の下  
のきりくも 全

こし

のや

庭掃て出てや寺  
こちる柳 全

名所のや

難波津  
や田螺

のふとも  
冬籠 全 疑のや

梅白しまのや 雀とらなまま  
しあき人の小袖も今や土用干

此や疑のや、上小疑のや、あるときは、下あ、  
嬉しき 恋しき、あき文字、ありし、ミ、の過去の、ま

字、又ハふのぬ、或いたる、  
ふより、又くすつふむむ、人のとむひ、むも唯ぞ

のや、何の両用とらる、より、く、の如く、結び、詞のあ  
らざる、バ、語格、とのをも、但、味のや、め、結ひ、詞の

あ、のぬ、のこ

あひ抄 ふうの全同  
心の詞あり、中む、う、あり

あ、り、く、疑、どうも、と、よ、く、味、どう、れ、と、よ、む、習、と、ま、の  
ア、ハ、ぬ、の、味、る、意、う、も、ハ、三、笠、の、山、ふ、い、で、一、月、ふ、こ、こ、も

と疑ふ  
意あり

も、の、ぬ、て、う、が、ぬ

願ひの、ま、あ、ら、ふ  
黄菊、ち、ら、ま、

その外の名ハ、  
わの那 嵐雪

過去せし

い、ひ、見、く、  
さ、あ、ら、ま、の、い

ふ、の、て、此、し

未来のし

こ、く、ま、ま、の、  
類、あ、ま、の、あ、り、

ふのぬ

き、あ、ら、ま、の、ぬ、あ、ら、ま、の、ぬ、  
ふ、と、ふ、の、あ、ら、ま、の、ぬ、あ、ら、ま、の、ぬ、  
畢ぬ

きつぬきつぬ、思ひぬ、おひぬ、つハ大く

とるの、と付らぬ、切らぬ、ツツの、  
里語おわらぬ、**萩**、ひびく、**下知の詞**、見よ

と人おわらぬ、の暮路通、**下知の詞**、見よ、  
まていけ、お人お下知、**加**、疑ひのか、**ゆ**

如くある、といふ皆切らぬ、**切**、切らぬ、**よ**、  
聞ひ、見ひ、おどひ、下知おわらぬよ、**野**

べきと聞ひ、見ひと切らぬ、**奥の細道**、蛤の二見へ、**野**、  
中の杭よ、秋ぞ、**芭蕉**、炭俵八巻と、**野**

十月、嵐雪、**と**、寒くともふり寝る夜を、**と**、  
若衆ぞ大根引、野童この類のを、**と**、野童この類のを

野坡、此類のを、**と**、野童この類のを、**と**、  
おんこの藪ふく、野童この類のを、**と**、野童この類のを

ハ疑のやの糸ふり、野童この類のを、**と**、野童この類のを、  
お何と、おハ勿の意ありの盃、**と**、お下

お何と、泥ふく、村樂、芭蕉、**と**、お下、  
おけてねへめれ、結ひ詞のあり、**と**、結ひ詞のあり

お格とくのもむ、白魚は價あるこそ恨あら、**と**、芭蕉、  
おつらへを餅を、おね桃の花、今又一例、**と**、利雪、な

おつらへを餅を、おね桃の花、今又一例、**と**、利雪、な、  
おのひ抄、世お願ひのふんとつひつけられど唯ぞ、**と**、と詠らるる詞あり

おのひ抄、世お願ひのふんとつひつけられど唯ぞ、**と**、と詠らるる詞あり、  
おのひ抄、今より後ぞ、**と**、らん

おのひ抄、今より後ぞ、**と**、らん、  
おのひ抄、同上、其心の、**と**、らし

おのひ抄、同上、其心の、**と**、らし、  
おのひ抄、同上、らんより、**と**、けらし

おのひ抄、同上、らんより、**と**、けらし、  
おのひ抄、世の中ふらして櫻のありせむ、**と**、まよし

おのひ抄、世の中ふらして櫻のありせむ、**と**、まよし、  
おのひ抄、春のさうらひの、**と**、めつこ

おのひ抄、春のさうらひの、**と**、めつこ、  
おのひ抄、蕉門の俳諧ハ俗談平話と専門と、**と**、めつこ

わひ抄 その大ひよとわしそよりてつひの心あり

里言のオモキキチヤ、ヤウスチヤあいのふ似う **古今**

よつこ川かみらゝんてあぶる **あひ抄** ナア

めりマラハ錦中やゝまあひ **な** と人ひひつる

詞あり思ひあまありていひていひていひていひて

**曠野** 二日よめめりのりせよ花の春 **芭蕉** **を**

**炭俵** いそぎき春と雀のうま **あひ抄** 其

袴酒堂この類のを切る **し** ひきむひと

よふうくわてしよきわとあり **もろ** たりて

とえうしよとあそひふ詞あり **わりのつ**

あひ **なり、わり** つひあれい切 **かし**

詞あり **あひ抄** あつちある心のつちふこと **同上** 里

はうとゆて人とらうとてのそらう **か** 言ふカ

ノとあ心とくして落着る **詞** ありのわとく

ふらふいとふらふと春の春 **い** も詞

ふ **や** これの理と我よりハ決せしとき人

の心ハ決定を發せよ **詞** ぐら **や**

同じ類の詞も多し **か** ハハサラデハナイ

と決定し **や** ハハサラデハナイと落着る **これ**

自然と **や** かのとの差別あて **ら** あり夏わら

**古今** 春の夜の闇ハあやあ **梅** の花色 **と** こと

は香 **や** ハハサラデハナイと落着る **い** ふ **あ**

と心 **ら** ぐら **落** 着る **あ** **い** **ふ** **あ**

**い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ**

**い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ**

**い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ**

**い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ**

**い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ**

**い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ**

**い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ**

**い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ**

**い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ**

**い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ**

**い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ** **い** **ふ** **あ**

**神祇の格**

尊とふれや合ぬ御逢官 芭蕉  
猶とく花ふ明や神の顔

雑



教の格

涅槃金や撥手合さる敷珠の音、  
灌仏の日小生几も鹿の子うね、

戀の格

紅梅やもぬ恋つゝ。玉簾、

無常の格

かごと死ぬるきこゆるは蟬の聲、  
鬼祭つゝも焼場のくもりをれ、

追善の格

秋凡ふとれてうねき桑の枝、  
當歸より哀の塚の董草、

述懐の格

つらや和肝の緒やうく羊の暮、  
父母のちきりふさひ雉の聲、

羈旅の格

ひらう脱てうらふゆめ更衣、  
羊くれぬ登きこ車鞋をたふら

餞別の格

鮎の子の白魚送る別うれ、  
此心推せよ花ふ立器一具

名所の格

五月雨ふくれぬ物や瀬田の橋、  
松島や千々ふさごとて夏の海、

即興の格

景清も花見の座ふハ七兵衛、  
ひりきけ秩父のめくく角力取、

昼圖の格

粽つらうこ手ふたさむ額髪、  
降まると竹植る日ハ暮と笠、

昼讀の格

山吹や宇治の焙炉の白ふ時、  
わろじの俳諧とらんぬる胡蝶、

墨字の格

奈良七重七堂伽藍ハ重櫻、  
昼顔ふひるぬせうりの床の山、

時宜の格

梅白しきのつや雀とぬれまけり、  
やとり木は猶やう木や梅の花、

時宜とハ其時小暇を其人は對して情と述ることふ、  
前の一章ハ野さらしりの紀行ふ三井秋風ハ山家と訪

ふとつみ端書ありくあふくと林和靖よ比しあふ、  
時宜あり後の一章ハ曠野集ふ出て細代民部息

ふあひてといふ端書あり句意ハ笈日記ふこれハ、  
其父弘氏の主此道の凡雅ふ名ある故ふとべし云、

賀の格

先祝へ梅と心の冬こもり、

雑の格

くららくバ杖突坂と落馬哉、  
あきよとこふ誰松島とこころ

貞享式 今按さるゝ名所は雜の癡句といふ句ふ其所の名と出し其風景の情とつゝあつても當季とむきとんしむを空情ハ  
くあふびあふあふあふあふ

押字

何の木の花ともあふひひれ

上何とつゝ下ふふとい結びとつゝのさむぢ  
あふとつゝあふ上何と押あふと

抱字

夕顔や秋いろくの飄る

上よやとわり下よふとい結びとつゝのさむぢ  
を秋ハのハ文字あて上のやかりと抱あふ

増補歳時記葉草雜之部終

益字り春藝新

俗稱 春多術

嘉永四年辛未十月發行

大坂書林

ふ高橋筋南まて丁目

敷屋屋九々間

ふ高橋筋北まて丁目

河内屋屋五々間

同 唐物所

河内屋屋六々間

同 本町四丁目

河内屋真七

江都

須原屋茂之衛  
山城屋佐之衛  
岡田屋嘉七

尾州屋古屋

永樂屋東四郎  
菱屋孫之衛

勢州屋

山形屋信吉屋門

京都

吉野屋仁之衛  
株屋勘之衛

阿州屋高

天満屋武之衛

姫路

本莊屋次

防州屋山

浅田屋孫之衛

